

醫學者中村耕雲の系譜

— 児島亨と内山完造として魯迅と —

久保卓哉

岡山県後月郡高屋村丹生の漢方医薬者である中村耕雲とその一家一門の系譜について、これまで発表された文献に検討を加えた上、これまで未発表の墓碑文はそれを翻字して内容を明らかにした。

「キーワード」 中村耕雲 漢方医薬 後月郡高屋村丹生 中村藤市 中村藤一郎

はじめに

魯迅と内山完造のことはよく知られている。その時上海の内山書店で働いていた児島亨（旧姓中村）のことは、魯迅の「日記」に四回登場するにもかかわらずこれまでさほど注目されていなかった。否、言葉を換えよう。注目されてはいたがその存在の大きさに気付く人は少なかった。数少ない気付いた人とその著に吉田

曠二（『魯迅の友・内山完造の肖像 上海内山書店の老板』新教出版社、一九九四年）と、泉彪之助（『魯迅と上海内山書店の思い出』著者：内山正雄・芳枝、児島亨・静子 協力：鎌田勇夫、西林寿美 編集兼発行者：泉彪之助、武蔵野文学舎、一九九六年）、及び、佐藤明久（『父と上海』山陽新聞、二〇〇五年四月八日 「児島亨と魯迅先生の淵源」『魯迅 跨文化対話 紀念魯迅逝世七十周年国際学術討論会論文集、大象出版社「北京」二〇〇六年）がある。そして研究機関としては、上海魯迅紀念館（『日中友好の先駆者 魯迅と内山完造写真集』上海人民美術出版社、

久保卓哉

一九九五年）がある。

その児島亨の高祖父（四代前の祖）中村耕雲と、医家としての中村氏について調査した結果をしるすのが拙論の目的である。

後に児島姓となる中村亨は、一九一三年（大正二年）九月二十五日岡山県後月郡高屋村丹生（現在の岡山県井原市高屋西丹生）の山あいの地で父中村正臣、母しま（志満）の三男三女の長男として誕生した。中村家は江戸時代に二代続いた医師を祖に持つ有力家系で、亨の生家も高い土塀が張りめぐらされた大きな屋敷であった。以下に中村家の祖を五代前まで溯り辿ってみよう。

中村忠蔵

〔五代前 中村忠蔵〕 忠蔵は芳井宇戸川の西田氏を妻とし、備後御領の三吉氏を後妻とした。一七七四年（安永三年）一八三五年（天保六年）十月六日。享年六十二歳。長男を三郎次といい、二男は医薬学者となり耕雲と号した中村藤市である。三郎次が本家を嗣ぎ、耕雲は分家して、本家のすぐ下に居を構える。

中村忠蔵墓石

墓碑 正受院得右居士

碑陰 天保六年乙未十月六日没 享年六十有二 通稱忠蔵



中村忠蔵墓碑（写真全／久保卓哉）



中村忠藏碑陰

中村耕雲

〔四代前 高祖父 中村耕雲〕 忠藏の二男、三郎次の弟。一七九七年（寛政九年）〜一八六五年（慶応元年）八月十八日病没。耕雲の事績は次の五つの文献によって明らかにされている。既に出版された文献とその内容をここに再録しておく。

【一】『後月郡誌』岡山県後月郡役所編纂 一九二六年（大正十五年）。（復刻本：『後月郡誌（全）』編者後月郡役所 発行者：中村安孝 発行所：名著出版 昭和四十七年四月二十二日発行）

醫 中村耕雲

（筆者附記：誤植と思われるものはその字の下に括弧をつけ、正字を示し、文意に従い原文の読点を句点に直した。なお原文はすべて旧字体である）

中村耕雲は通稱藤市政寛（寛政）九年高屋村字丹生に生る。父忠藏母は三吉氏。夙に藥物醫道に志し常に山野を跋渉して草根木皮を探索研究惟れ日も足らず。自ら醫藥を製して衆人を救ふ。後年家事を兒孫に譲り専ら斯道の研究に従事し、常に四方に交遊して學大に進む、高屋村は舊幕府料地にして石州大森代官所の支配地たり。時の代官其の名を聞き招きて之を試みしに、頗る採藥配劑の識あり。即ち命ずるに石州産出の藥草調を以てす。耕雲之に従事し苦心慘憺具さに其の任務に盡瘁せり。又石州の某銀坑内に毒瓦斯發生せり。耕雲自ら検究せし藥物によりて之を救濟せしことありと云ふ。安政六年日向飢肥藩伊東家の招きに應じて之に赴き全藩に於ける醫藥の材料を調進す。後友人及び子弟の各地に散在せるもの皆來つて教を乞ふといふ。飢肥藩より歸國の時は阿万忠厚の送序に曰く、

中村翁耕雲、將帰備中、乞言於予曰、「某貧且賤（賤）、又無他技能、独酷好採藥。謂是亦可以濟斯民矣。遂奉大已貴少彦名之遺意專力於此學、三備伯石之山莫不究討積年二十、得四百余种。因欲偏探諸州、而力未能焉。適邦君過聽、令君召采藥封內。某嘗聞、日州神聖之所龍興、

地又在皇國之極南、風氣和暖、草木條暢。其山險而秀、峯巒廻合、奇岩壁立。水流於其間、清而駛、衝激奔突、震撼兩岸、懸焉而瀑、瀦焉而淵、千屈万轉、始出平地。

阿萬忠厚撰
時任彝拜書

是以背陽向陰之地、終古不見日月、則雖宜寒地者亦必生之、意常欲一往。及聞是命、魂飛神馳、遂施施來是土、今既半年。凡平原田野、深山幽谷、狐狸之所栖息、人跡之所罕至、以及巨海洪渺之浜、洲沚激澗之隅、足蹈而手掘之、其所指名、至二百余种。何其夥也。而其最良者、木有桂樟、藥秦、厚朴、胡榭、鬼縛、吳茱萸、伏苓、桑寄生。艸有、人參、金鎖匙、蒼松、木香、細辛、土茯苓、甘遂、遠志、柴胡、薯蕷。獸有猪胆、鹿角、羚羊角。虫有密(蜜)。海有石決明、真珠、海參、鷓胡菜。是皆天下之至珍而神聖之所遺以沢後世也。於是南方清淨之氣所釀育、千古未掘之靈草奇藥、幾尽發其秘、亦足以少荅邦君寵遇之屋、而補大已貴少彥名之遺意邪」又曰「某之指名藥品也、人或議之曰、『尋常藥物、人人能知之、何待煩指名之』某以為不然。夫某之於藥物也、觀則采、采則驗、雖如桂与樟尚且録焉而不遺(遺)、欲辨其良否以徧喻人也。且夫深山野人、猶或能識藥物而采用之。是猶猫之病而喫天蓼、乃天機之妙發於自然。誰教之、而誰令之也。然彼特識之而已、不能指名以広其用、与不識者相距一間耳。某則異於此。采則驗、驗則書、欲徧喻斯民以広其用。是亦大已貴少彥名之遺意也。以吾子所見可乎、不可乎」予曰「可哉」遂叙其言以為榮婦之贈。

(筆者附記:以上の漢文体は、原文の旧字体を新字体に直し、誤字と思われるものはその字の下に括弧をつけて正字を示した。原文は読点のみを用いて区切っているが、文意に順い、読点を句点に直した所があり、耕雲と忠厚の發言範圍は鈎括弧で示した。)

水戸景山公 徳川斉昭は夙に古醫道の發揮に勉め、弘道館中に醫學部を設け、本草蘭學、調藥、製藥の四局を置き、藥園を附屬せしめ、天下の藥物靈草を集む。耕雲仍ち自己の發見採取の人形人參なるものを其の友日長筑石 山野上村の人によりて景山公に獻す。蓋し耕雲の藥物研究は皆に學問として見るべきのみならず、其志す所は當時水戸に於て主張されたる國粹保存の精神を受けしこと明かなり。其の子弟に示す書中に曰く

漢土の醫追々行はれ、天下蕭然妄りに彼れの藥を移し、皇國の産物を輕んじ無用のものとなす。爾後又西洋醫風大に行はれ蘭舶の品を主張す故に絶特の良品も異邦の名を冒さざれば不用に至り全く神聖の教を廢す。悲哉。

又曰く

一藥を抜き、一草を發見すれば陰徳後世に及ぶ。我徒たるもの宜しく此意を旨とし不迫利、不貪名、正心誠意其

の力を盡すべきなり云々

と、慶応元年八月十八日没す、年六十九。耕雲三男一女あり、長を穆齋といふ。和蘭醫術を修む。出で、瀧氏を嗣ぐ。二男藤一郎家を繼ぐ。三男清太郎分家す、長女里登藤田氏に嫁す。

(筆者附記・以上『後月郡誌』)

以下に「阿萬忠厚送序」の漢文を訓読して示しておく。

中村翁耕雲、將に備中に帰らんとし、言を予に乞うて曰く、「某は貧にして且つ賤、又他の技能無く、独だ酷だ採薬を好む。謂うに是れにても亦た以て斯の民を濟う可きなり。遂に大已貴、少彦名の遺意を奉りて専ら此の学に力め、三備・伯・石の山究討せざる莫く年を積むこと二十、四百余种を得。因りて偏く諸州を採ねんと欲するも、力未だ能わず。適たま邦君過、聴り、君をして召して薬を封内に采らしむ。某嘗て聞く、日州神聖の龍興る所、地は又皇国の極南に在りて、風氣和暖にして、草木條暢。其の山は険にして秀、峯巒廻合して、奇岩壁立す。水は其の間に流れて、清にして駛り、衝激奔突して、兩岸を震撼させ、焉に懸かりて瀑し、焉に瀦りて淵し、千屈万転するも、始まりは平地より出づ。是れは以て陽を背にして陰に向うの地にして、終古日月を見ざれば、則ち宜しく寒地者も亦た必ず之を生くべしと雖も、意は常に一往せんと欲す。是の命を聞くに及び、魂は飛び神は馳せて、遂に施施として是の土に来て、今や既に

半年。凡そ平原広野、深山幽谷、狐狸の栖息する所、人跡の罕至なる所、以て巨海洪渺の浜、洲泚(川の砂州)激灘の隅に及ぶまで、尽く足にて蹈み、手にてこれを掘り、其の指名せし所、二百余种に至る。何ぞ其の夥しきや。而して其の最良のものは、木には桂樟、藥秦、厚朴(ほのき)、胡榭、鬼縛、吳茱萸、伏苓、桑寄生有り。艸には、人參、金鎖匙、蒼松、木香、細辛、土茯苓、甘遂、遠志、柴胡、薯蕷有り。獸には猪胆、鹿角、羚羊角有り。虫には蜜有り。海には石決明、真珠、海參、鷓鴣菜(海人參)有り。是れ皆天下の至珍にして神聖の遺して以て後世を沢す所なり。是に於て南方清渚の氣の釀育する所、千古未掘の靈草奇薬は、幾んど尽く其の秘を發にし、亦た以て少しく邦君の寵遇の屋に答えて、大已貴、少彦名の遺意を補うに足らんか」と。又曰く「某の指名せし薬品や、人或いはこれを議して曰く、『尋常の薬物にして、人人能くこれを知る。何ぞ煩わしくこれを指名するを待たんや』と。某は以て然らずと為す。夫れ某の薬物に於けるや、觀れば則ち采り、采れば則ち驗し、桂と樟の如きと雖も、尚お且つ録して遺さず、其の良否を辨ずるに以て偏く人に喩えんと欲するなり。且つ夫れ深山の野人は、猶お或いは能く薬物を識て、采りてこれを用うるがごとし。是れは猶お猫の病みて天蓼(てんりょう)またびを喫いて、乃ち天機の妙自然に発するがごとし。誰ぞこれを教え、誰ぞこれをせ令

久保卓哉

めんや。然れども彼は特にこれを識るのみにして、指名して以て其の用を広むる能わざれば、識らざる者と相い距たること一間なるのみ。某は則ち此れに異らず。採れば則ち驗し、驗せば則ち書き、徧く斯民に諭して以て其の用を広めんと欲す。是れも亦た大己貴、少彦名の遺意なり。吾子の見る所を以てすれば可なるか、不可なるか」と。予曰く「可なるかな」と。遂に其の言を叙べて以て榮帰の贈と為す。

阿万忠厚撰

時任彝拜書

【二】『崑山片玉集』編著者：井原市教育委員会・明治百年記念刊行委員会 発行者：井原市 発行所：井原市教育委員会 一九六九年（昭和四十四年）六月一日発行

中村耕雲 寛政九年生 慶応元年八月一八日歿

中村耕雲は通称藤市寛政九年（一究七）備中後月郡高屋村丹生（現井原市高屋町）に生まれ、慶応元年今から百四十年前に同地に歿した本草学（薬物学）の大家である。

父は忠藏、母は西田氏、その次男として家を嗣いだ。それは兄の三郎次が若いときから家を出て、後には備後中条村で苗子帯刀の庄家役を勤めなどして、丹生の地を離れたからである。この三郎次という人も気性のしつかりした人で、用水

問題などで江戸の老中に直訴して村民のため働いたことが伝えられている。

耕雲は、はじめ家事に従っていたが、若年の時から濟世の志があつて、土地に留ったままこの志を遂げるには、薬物の研究に若くものはないと考え、本草学の研究に入った。このために多くの書を読み、多くの先輩の教えを乞うだが、最も力を入れたのは自分で山野を巡って採集し、実物について研究することであつた。耕雲の考えでは、庶民の病気を治療するには、珍奇な外国の品に頼つてはおられない、高い身分や金持ちの人にはそれは可能であろうが、それでは医は仁術とはならない。他方吾々の周囲には立派に薬用となるもので、棄てて顧みられないものが少なくない、これを開発すれば人々の幸福は如何ばかり増すであろうか、このような考えから耕雲は国土の産品を開発することに熱中したものである。

そしてこの場合、耕雲は最も実証を重んじ、また記録を整頓して広く世に知らせることが必要と考えた。幸いその子の藤一郎が成人した後は研究に専念出来るようになったので、三備作伯の山究討せざるなしというように業が進み、名声も大いに挙げた。

耕雲はこのような考えから、水戸の烈公の医業思想に共鳴し、その賛天堂記に感激していたので、自分の発見した人形人蔘を友人の日長筑石を介して公に献じ、その賞讃を得た。この経緯は古医道学者として著名であつた佐藤方定の「備急八葉新論」に出ている。

高屋は天領で石州大森代官の支配下にあった、安政三年

(一八五六)代官屋代増之助は耕雲を召して、領内の薬物探索に当らせ、耕雲は熱心に事に従った。又かの地の門人の指導にも当った。特に銀坑の鉍毒を消す方法を工夫して、人命を救ったこと、代官の命により探索発見した産品を大阪に仕向けたことなど、記録によつて知ることが出来る。安政五年前記佐藤方定は幕府ら北海道探險の命を受けたので耕雲に同行を乞うた。耕雲は後に述べるように日向飢肥藩の招きに承諾を与えていたので同行を断つたが、この時の佐藤方定の書翰に「貴兄蝦夷路に思召有之候由」と書いている。このことは齡傾いていた耕雲が北海道まで研究旅行をしたいという壮烈な志をもっていたことを示すものである。

安政六年耕雲は飢肥藩主伊東祐相の招きで日向に赴いた。これは当時江戸にいた飢肥出身の大儒安井息軒の藩公への献言にもとづいたようである。耕雲の友人宮大龍の高弟同大沖は江戸で息軒と交友があつたことは、息軒の過訪録によつて明らかであり、息軒は日向の産業に関し、度々藩公に助言しておる。耕雲はこの行で日向の山沢海浜をよく探索し、数々の成果を挙げたが、この事実は息軒の高弟で飢肥藩士阿萬忠厚の「送中村耕雲序」に詳しく出ている。更に注目すべきことはこの時耕雲は日向と備中の間に定期船を通じ、産品を交易して両園の民福を増すことを計つたことである。これには飢肥藩も乗氣であつたことは文書によつて窺知出来るが、今、藩の紋章のある船旗が中村家に残されている。しかしこれは

幕末の多事な世情と、耕雲の急逝のため実現に到らなかつた。

このような関係で阿萬忠厚はじめ飢肥の藩臣数名が高屋駅の耕雲の家を訪れている。この外耕雲の事蹟については数々語り伝えられている。高屋駅で枇杷葉湯をつくつて路傍に置き、行旅の人の苦を救つた。この話は当時地方の美談であつた。金浦の漁民の大家議に適切な調停をして長く土地の人に徳とされた。領分ちがいの一橋陣屋からは、しばしば助言が求められていた。

耕雲の配は三吉氏、三男二女があつた。長男穆齋は大阪でオランダ医学を修めたが、不幸早逝した。次男藤一郎は家を嗣ぎ、明治の始めまで医を業とし、傍ら村塾を開き子弟の教育にあつた。耕雲の学問は現代科学とは異なつていたが、その濟世の志と学問に対する見識は今日の吾々に多くのものを教えている。

昭和三九年一〇月二七日、中村耕雲翁頌徳会は耕雲の頌徳碑を建ててその徳をたたえた。

【三】『井原医史』編著者：内田玄碩 発行者：井原市医師会 発行所：井原医師会館 一九七二年（昭和四十七年）十二月三十一日 発行

中村耕雲（寛政九年生、慶応元年八月十八日歿）

(1) 高屋村丹生

(2) 中村忠蔵の次男として生れ、若年の頃より濟世の念あり、

薬物医道を志す。常に山野を祓渉して草根木皮を探索研究し、医薬を作り衆人を救った。

(3)高屋村は天領で、石見国大森代官に支配されていた。耕雲の名声が代官に知られ、安政三年召されて石見領内の薬草調査を命ぜられ、功績を挙げた。特に銀坑に鉍毒ガスが発生した時、その研究した薬物により消火、人命を救助した。安政六年、江戸の大儒安井息軒の献言で、日向の飢肥藩主伊藤祐相に招聴され、日向の山野海浜を廻り、医薬の材料を探索調進して貢献した。また水戸の景山公に耕雲自ら発見した人形人参を献じて賞讃を博した。

(4)美談としては、高屋村で枇杷葉湯をつくり、路傍に置いて旅人の苦痛を救ったり、又金浦で漁民の大争議が起った時、その調停の労をとり、土地の人に永く感謝されたと言う。

(5)耕雲には三男二女あり、長男穆斎は大阪で蘭医学を修めたが早逝す。次男藤一郎が家を継ぎ、明治の初まで医を業とし、傍ら村塾を開き子弟を教育した。

昭和三十九年十月二十七日、耕雲の功績をたたえて頼徳碑が建てられた。

現在遺族は、その曾孫中村威が井原市役所教育委員会に勤めている。

【四】『井原市史』I自然風土・考古・古代・中世・近世通

史編 編集：井原市史編纂委員会 発行：井原市、二〇〇五年

(平成十七年)三月三十一日発行

中村耕雲

中村耕雲は医師というよりも、本草学者として知られる。寛政九年(一七九七)高屋村丹生に生まれ、常に山野をめぐって草根木皮の探索・研究をし、自ら薬を製造して人々を救ったという。家事を児孫に託し、諸国をめぐって研鑽をつんだ。

高屋村は幕府領であり、耕雲は安政二年(一八五五)正月、備後上下代官所に召し出され、二月には石見大森代官所へ赴いて薬物調査を命じられた。また四月には弟子の宮太柱を伴って大森へ行き、鉍山病患者のための通気道調査を行っており、後に山本春泰もこの調査に随行した。同年八月には、太柱が耕雲に大森銀山で使う薬草の調査を依頼しており、耕雲は秘蔵の人形人参(薬用人参)を一斤三二匁で譲渡している。宮太柱は耕雲の友人であった宮太立の二男である。父子は大森銀山で鉍毒予防の研究をし、太柱は鉍山病予防対策である『済生卑言』を著して、代官から褒賞金を与えられている(『笠岡市史』第二巻六〇一〜六〇五頁)。

また安政六年(一八五九)耕雲は、日向の飢肥藩(現、宮崎県日南市)伊東家の依頼により、領内の薬草の調査をしている。耕雲が飢肥藩伊東家の家中へ送った書状の下書が残されており、飢肥藩での調査の様子を知ることができる(井原市所蔵文書)。

飢肥藩からの依頼は、上下代官所を通して二月中旬に耕雲

へ通達された。路銀として一五両が添えられている。耕雲は三月八日に高屋を発ち、四月一日に日向国飫肥領清武(現、宮崎県清武町)に着いた。そこから所々を廻村し、二十一日に城下へ入って八月二十一日まで調査をし、再び清武へ戻って調べ残した場所を調査した。一応の調査が済んだので、耕雲は九月十八日に立出して、十月九日に帰国した。耕雲は書状の中で「調査の結果、飫肥藩の領内には野草の種類が多く、その中には良品もかなり確認された。詳細は貴藩の本草掛よりご通達があると思うが、ご一報申し上げる」と伝えている。飫肥藩の耕雲への依頼は、飫肥出身の儒者安井息軒の献言によるという。息軒は江戸で私塾三計塾を開き、後に幕府に召しかかえられて昌平黌の儒官となった人物である。息軒の下では坂田警軒や宮太立らが学んでおり、飫肥藩への耕雲の招請は、こうした学者らの交流によるものであることがわかる。

また耕雲は人形人參を、薬園を設け古医道の發揮に努めていた水戸藩主徳川斎昭に献上したという。耕雲の薬物研究が、学問としてのみならず国粹の精神によるものであることは、耕雲が弟子に示した「漢土の医道々行われ天下肅然妄りに彼れの薬を移し、皇国の産物を軽んじ無用のものとなす、しかる後又西洋医風大に行われ蘭舶の品を主張す故に、絶特の良品も異邦の名を冒さざれば不用に至り、全く神聖の教を廢す、悲むかな。」という言葉にもよく現れているといえよう(『後月郡誌』一〇九四〜一〇九五頁)。

【五】『岡山県歴史人物事典』編集、岡山県歴史人物事典編纂委員会 発行人：大倉徹彦、発行所：山陽新聞社 一九九四年(平成六年) 十月三日発行

中村耕雲

一七九七〜一八六五・八・一(寛政九〜慶応二)

井原市高屋町の人

本草学者。後月郡高屋村丹生で、中村忠藏の二男として生まれる。若い時から本草学(薬物)についての学問に関心を持ち、多くの先輩に教えを受け、山野を駆け巡って薬用となる植物を採取し研究した。当時の高屋は石見大森代官所の支配地であったため、一八五六年(安政三)代官より石見の薬草調査を命じられ、銀山で鉍毒ガスが発生した時、研究した薬物が人命の救助に役立ったという。五九年(安政六)には飫肥藩の招きで日向(現宮崎県)地方の調査を行い、二〇〇余種の薬草を採取している。また水戸藩に自分が発見した人形人參を献上している(『備急八薬新論』)。耕雲の集めた薬草は四〇〇種にも達していた。一九六四年(昭和三九)没後百年を記念して中村耕雲顕彰会によって生家に顕彰碑が建てられている。(『井原後月人物誌』) / 小田皓二

【六】中村耕雲先生頌徳碑、岡山県井原市高屋町西丹生中村耕雲旧居跡、碑石：高一五九〇mm、幅六〇〇mm 台石：高四四〇mm、幅一三〇〇mm 台座：高七〇〇mm、幅二八〇〇mm

久保卓哉

(筆者附記：この碑文は芳井町の先賢碑文を調査した報告刊行

物である『芳井の文化財 第二集 石文録』(発行所岡山県後月郡芳井町芳井町教育委員会、芳井町文化財保護委員会、一九八九年(平成元年)一月印刷発行)やその他の文献に未収である。大阪大学文学部教授であった蔵内数太が碑文を撰し、一九六一年(昭和三十六)一月厚生大臣古井喜実の揮毫を得て、一九六四年に碑が建てられた。児島亨の次弟中村威氏は、耕雲の縁戚に当たり井原市西江原出身である社会学者蔵内数太の尽力によると筆者に語ってくれた。蔵内数太には『蔵内数太著作集』全五巻一九七六年及び『備中江原図解説』一九八九年がある。ここに翻字訓読し石碑の写真を添える)

中村耕雲先生頌徳碑

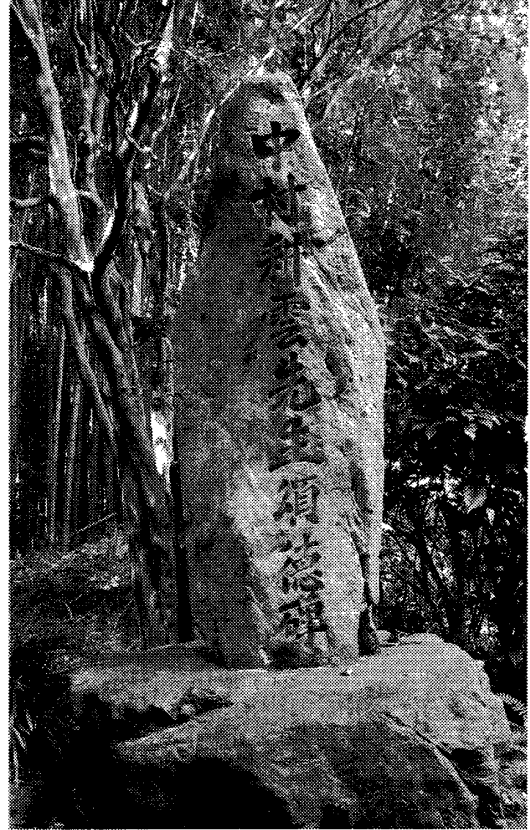
碑陰

按先生名藤市忠藏翁之子也寛政九年生初従家業旁修本草學後委家於男藤一郎專致力斯學三備作伯之山莫不究討聲名隆起乞教者亦頻安政三年石見大森代官召採藥于管内先生甚勉功績著明六年應飫肥侯之聘遠踏日南之險克答其寵遇慶應元年八月十八日病没于家先生之學由古醫道尤尚實証以爲濟民之道在窮國土之產品嘗以其所採人參上水府景山公見嘉納事夙載在書又其居高屋驛也置湯藥路旁以施行客世稱爲美事矣茲立碑誌行實之端以頌其德云有志者一同

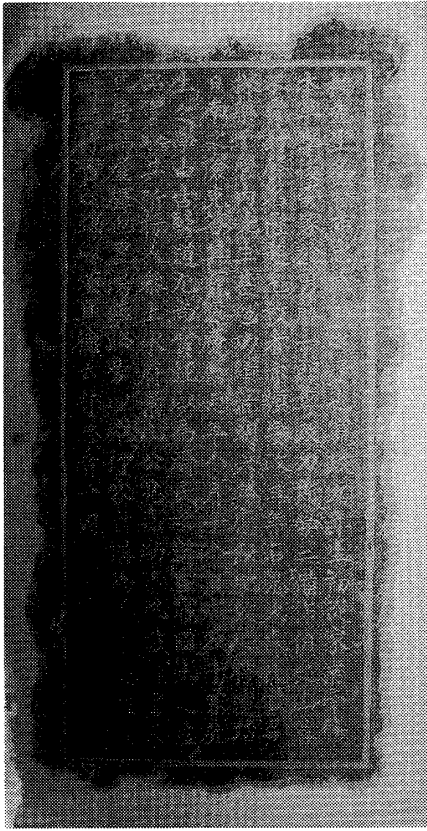
昭和三十六年一月厚生大臣古井喜実筆

按ずるに先生は名は藤市。忠藏翁の子なり。寛政九年に生まる。初めは家業に従い、^{かたわ}旁ら本草學を修む。後、家を男藤一郎に委ね、専ら力を斯學に致す。三備、作、伯の山は、究討せざる莫し。聲名隆起し、教えを乞う者も亦た頻りなり。安政三年、石見大森の代官召して藥を管内に採らしむ。先生、甚だ勉めて、功績は著明なり。六年、^{おび}飫肥侯の聘に應じて、遠く日南の險を踏み、克く其の寵遇に答う。慶應元年八月十八日、病にて家に没す。先生の學は、古えの醫道に由り、尤も實証を尚び、以て濟民の道を爲し、國土の産品を窮めるに在り。嘗て其の採る所の人參を以て、水府の景山公に^{たてまつ}上りて、嘉納せらる。事は夙に^{つと}載せられて書に在り。又其の高屋の驛に居するや、湯藥を路旁に置きて、以て客に施行し、世に美事を爲すと稱せらる。茲に碑を立てて、行實の端を誌し、以て其の徳を頌して云う。有志の者一同。

昭和三十六年一月、厚生大臣古井喜実筆



中村耕雲先生頌徳碑 井原市高屋町西丹生



碑陰の拓本採取

この中村耕雲頌徳碑を調査し碑影と碑文とをここに公表することができるようになった経緯について記しておきたい。

「主人の家はもともと医者の家柄で、祖父中村耕雲は、漢方の名医と人名事典にも出ています」（『魯迅と上海内山書店の思い出』著者：内山正雄・芳枝、児島亨・静子 協力：鎌田勇夫、西林寿美 編集兼発行者：泉彪之助 製作：武蔵野文学舎 一九九六年十一月十日発行 非売品）と話したのは児島亨夫人静子であったが、その詳細を知る手がかりは、二〇〇六年七月二十六日井原市文化財センターを訪問した時、大島千鶴研究員から文献とその複写を提供されたことに始まる。上記一から五の文献は大島氏の教示によるものであり、六の頌徳碑は、大島氏から紹介された児島亨の実弟中村威氏と八月二十四日井原市役所にて面会して石碑調査の承諾を得、同日石碑の所在を知るために訪れた井原市文化財センター―古代まほろば館の研究員から石碑に程近い所に住む中村一成氏を紹介され、九月三日中村一成氏に案内されて頌徳碑の前に立ち、写真と拓本を取ったことによる。

中村耕雲の碑と旧居

碑は中村耕雲旧居の脇にあり、陰刻の文字は鮮明であった。旧居は住む人が居ない廃屋で、戸口や壁が消失しているが、茅葺き屋根をトタン屋根に改修した家屋の骨格は健在で、奥には土壁の蔵が母屋に隣接していた。旧居の回りには瓦を敷いた赤土の土塀

久保卓哉

が現在でも残り、往時の偉容がしのばれた。現在五十五歳の中村一成氏によると、子供の頃は土塀がぐるりと取り囲み、屋根は茅葺き屋根で、家の前には畑があり、自分はよくこの家に遊びに来た。この家の中村九郎は東京大学を卒業し、この代に井原に出た、ということである。

耕雲の旧居は岡山県井原市高屋町西丹生にあり、井原市の西を流れる高屋川を溯る。川沿いの県道一〇三号線から大仏、野々迫、丹生へ上がる山道を東に折れ、登坂を二kmほど行くと、上野、吉井へは北東の道、大仏、天神山へは北西の道を登る二叉路に当り、北西の道を二五〇m北上すると、道の西側に野々迫〇・三km丹生〇・三kmと示した小さな道標がある。ここから丹生に向かうのだが、丹生への道はこれまで北上してきた方向とは真反対で、南西に向かっているから、道を目で追う場合は後ろをふり返らなければならぬ。丁度細い木の棒を二つに折って、端と端とを近づけたようなヘアピンカーブになっている。そこを南西に折れると林間の急坂があり、間もなく山腹に民家が見える。そこから先は道が分かれていても、小さい道はすべて畑か民家に入る道で、すぐに行き止まりになる。従って本道を取りながら山腹の道を更に登ったり下ったしながら一〇〇m行くと、登りの頂きに着き、そこから更に北へ登る側道が納屋の壁の脇にあり、納屋の前を十m下ると東丹生の地名を記した棒杭の標識がある。そこを北へ向かうと道は更に小さくなるが、一本道が続き山腹の曲りに沿って登って行く。その先には民家と畑がありやや眺望が開けるが、先に進むと道は更に小さく、水を含んだ腐葉土の道となって

山腹の樹影暗き中に入る。道の下に農家の廢屋があり、見下ろしながら南へ北へと彎曲する道を行くと道は登りになり、竹林と土塀が見える。その土塀が中村耕雲旧居の土塀である。土塀に沿って道を南に入ると蔓延った竹林が壁のように広がって光をさえぎっている。その竹林に囲まれるようにして頌徳碑が立ち、その奥に屋根の大きな旧居が今もある。

忠藏の二男である耕雲の旧居は中村の分家だが、本家は道路を挟んですぐ上の高台にあり、道に沿って土塀が続いていた。その距離は約五十坪。本家には耕雲の孫中村正臣とその三男三女が住んだ。三男三女は中村亨（児島亭、興讓館中学卒、一九一三年、二〇〇一年）、愛（井原高等女学校卒、二十九歳歿）、千鶴子（井原高等女学校卒、神戸市、一九一九年）、秀子（井原高等女学校卒、豊橋市、一九二三年）、威（興讓館中学卒、井原市、一九二六年）、晋（興讓館中学卒、福山市、一九二九年）である。これより以降本家の建物に住む者は居なくなり、現在では跡地だけが残る。

医薬学者中村耕雲の系譜—児島亨と内山完造とそして魯迅と—



(写真右) 中村耕雲旧居と頌徳碑
(写真下) 中村耕雲旧宅を囲む土塀が今も残る。左
下が耕雲の旧居。右上に高台がありそこに本家の建
物があつた。



久保卓哉

中村穆齋

中村耕雲の第一子。医師。大阪でオランダ医学を修めるも早逝。中村から出て瀧氏を嗣いだとあるから（『後月郡誌（全）』）、大阪の地で瀧穆齋として活躍したと考えられる。

中村藤一郎芳政

〔三代前 祖父 中村藤一郎芳政〕 中村耕雲の第二子。名は藤一郎号は芳政。医師。一八二六年（文政九年）〜一九一四年（大正三年）三月三日歿。享年八十九歳。藤一郎は八十九年の生涯で三人の妻を迎える。

最初の妻、幸は地元丹生の高木菊蔵の長女。四男四女を儲ける。長男中村文太郎は、内山松枝（吉井村沢岡、堂の上）と結婚し、丹生の耕雲の家を嗣ぐ。これより中村家は吉井村内山家と姻族となる。長女与志遠よしをは蔵内静三郎（西江原）と結婚。これより中村家は蔵内家と姻族となる。三男中村中村友三郎（一八五一年嘉永四年、〜一九二四年大正十三年八月二十六日、七十四歳）はブラジルに渡って丹生に戻る。四男中村新四郎は医師（後述）。妻、幸は五十一歳で逝去。

後妻は石川氏。一男、中村正臣を儲ける。正臣は、高梁市玉川町下切の黒川千代治郎の五女、志満しまと結婚して、居を本家に構え、後に高屋町の助役となる。その長男が魯迅と内山完造と深い繋が

りを持つ中村亨（児島亨）である。

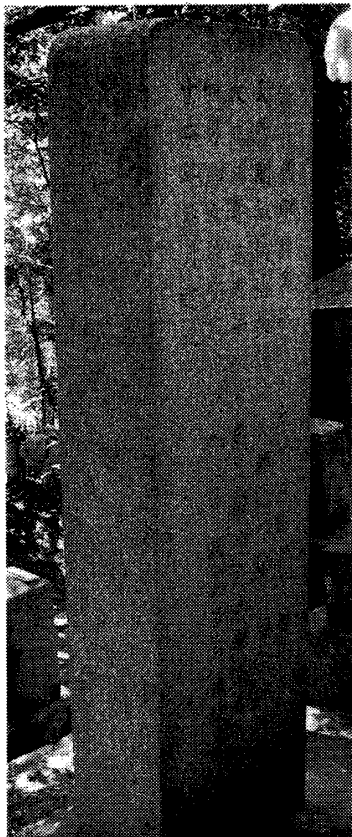
三番目の妻は藤井氏。福山市より迎える。子無し。藤一郎の長男文太郎と内山松枝の子である中村喜久太は、高屋町の町長を務め、喜久太の長男中村九郎は、東京大学を卒業して丹生の家に戻り、しばらく農耕生活をした後、興譲館中学の教員となって社会を教え、居を井原市に移す。東京から戻って丹生に居た九郎をよく知る中村晋氏（福山市）は「竹細工が上手で籠などは見事なものだった」と語る。喜久太の二男中村二郎は、養子となって中村家を出た。

中村藤一郎芳政翁墓

碑陰

案翁姓中村名藤一郎号芳政者耕雲翁第二子也天資明敏快活長談論又頗通時務爲郷黨所敬愛大正三年三月十三日病没壽八十九配高木氏生四男四女後室石川氏生一男及長皆各成家大正十二年三月建之

案ずるに、翁、姓は中村、名は藤一郎、芳政と号する者は、耕雲翁の第二子なり。天資明敏、快活にして談論に長ず。又頗る時務に通じ、郷黨の敬愛する所と爲る。大正三年三月十三日病没す。壽八十九なり。配は高木氏、四男四女を生む。後室は石川氏、一男を生む。長ずるに及び皆各家おのおのを成す。大正十二年三月之を建つ。



中村藤一郎芳政翁墓 碑陰



中村藤一郎芳政翁墓

中村新四郎

〔二代前 伯父〕 中村藤一郎と幸の四男。医師。一八五六年（安政三年）〜一九一〇年（明治四十三年）一月二十五日。享年五十五歳。岡山医学専門学校を卒業し、県病院の医員を務める。後、辞して小田郡金浦村（現笠岡市）で開業するに、治療を望む患者が列を成す。然し恬淡寡欲な新四郎は治療費を要求せず、その徳は人々から慕われた。急病に見舞われ二日後に歿す。高屋村丹生の本家の墓地に葬られる。妻、溝口氏は、大阪市南区田島町の溝口辰五郎の長女。

中村新四郎墓碑

墓碑

善性院釋文教履信居士
寶珠院釋妙完誠貞大姉

碑陰

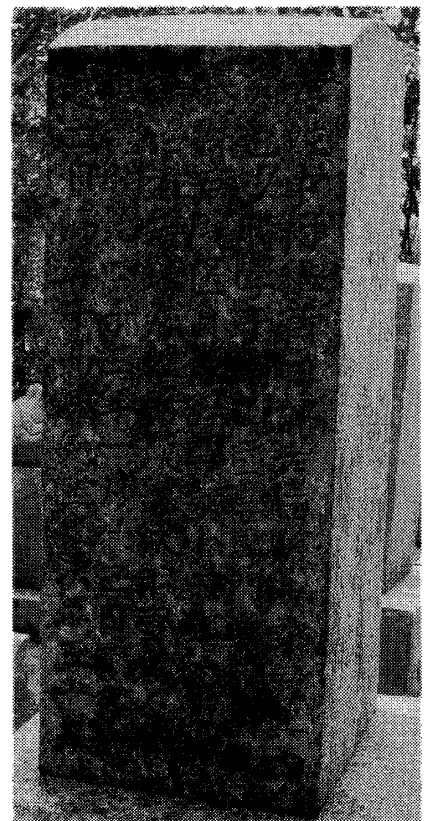
君姓中村稱新四郎考曰藤一郎君其四男也少時學于岡山醫學専門学校業成舉縣病院医員後辭開業小田郡金浦村請治者接踵然性恬淡寡欲不責取人懷其德明治四十三年十一月廿三日病不起越二日歸葬于高屋先生之次年五十五

久保卓哉

君、姓は中村、新四郎と稱す。考えて曰く、藤一郎君の其の四男なり。少き時、岡山醫學専門学校に學ぶ。業成りて縣病院の医員に擧げらる。後、辭して小田郡金浦村に開業するに、治を請う者踵を接す。然れども性は恬淡寡欲にして、責取せず。人は其の徳を懷う。明治四十三年十一月廿三日病みて起たず。二日を越えて帰す。高屋の先生の次に葬る。年五十五。



中村新四郎夫妻の墓碑



中村新四郎の医業の徳を刻した碑陰

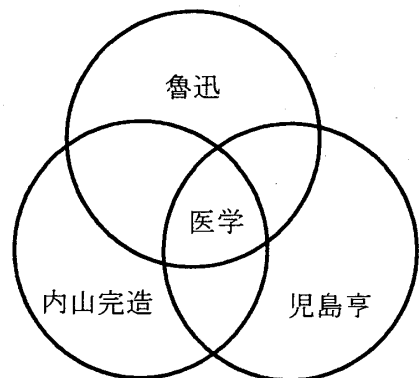
中村耕雲の里丹生に入ると不思議な感覚に襲われる。時の流れとは無関係な里がそこにあるからだ。栗、山毛櫨、檜、杉、檜、楓、漆などの自然林が覆い、里全体がたつぷりと水分を含んだ腐葉土の上にある。里人の腰には籠が揺れ、手には物騒な鉈が握られている。顔を合わせれば、一目でよそ者と分かるから、何故ここに来ていいのかと驚きの目が動く。その動きは長い間よそ者と出会っていない動きだ。こちらには分かる。だが驚きはすぐに柔和な親しみに変わり、次に、流れゆく水のような無関心の表情に変わる。里の時の流れは、今でも江戸の世でも同じであったろうと、里に足を踏み入れれば分かる。

耕雲、穆齋、芳政、新四郎の江戸、明治の医師たちはこの里から、学を起こした。その範を垂れた耕雲の偉業と、それを受け継いだ穆齋たち一家一門の賢俊さに思い到らざるをえない。

おわりに

後に内山完造と魯迅と密接な関係を持つ児島亨はこの里の中村家の長男であった。そして内山完造の内山家にも三代前に石川順介という天明から天保の江戸期に在世した医師がいる。そして魯迅は医学を学ぶために仙台医学専門学校にやって来た。三人は医学というものを共有する同心円で結ばれていると言える。

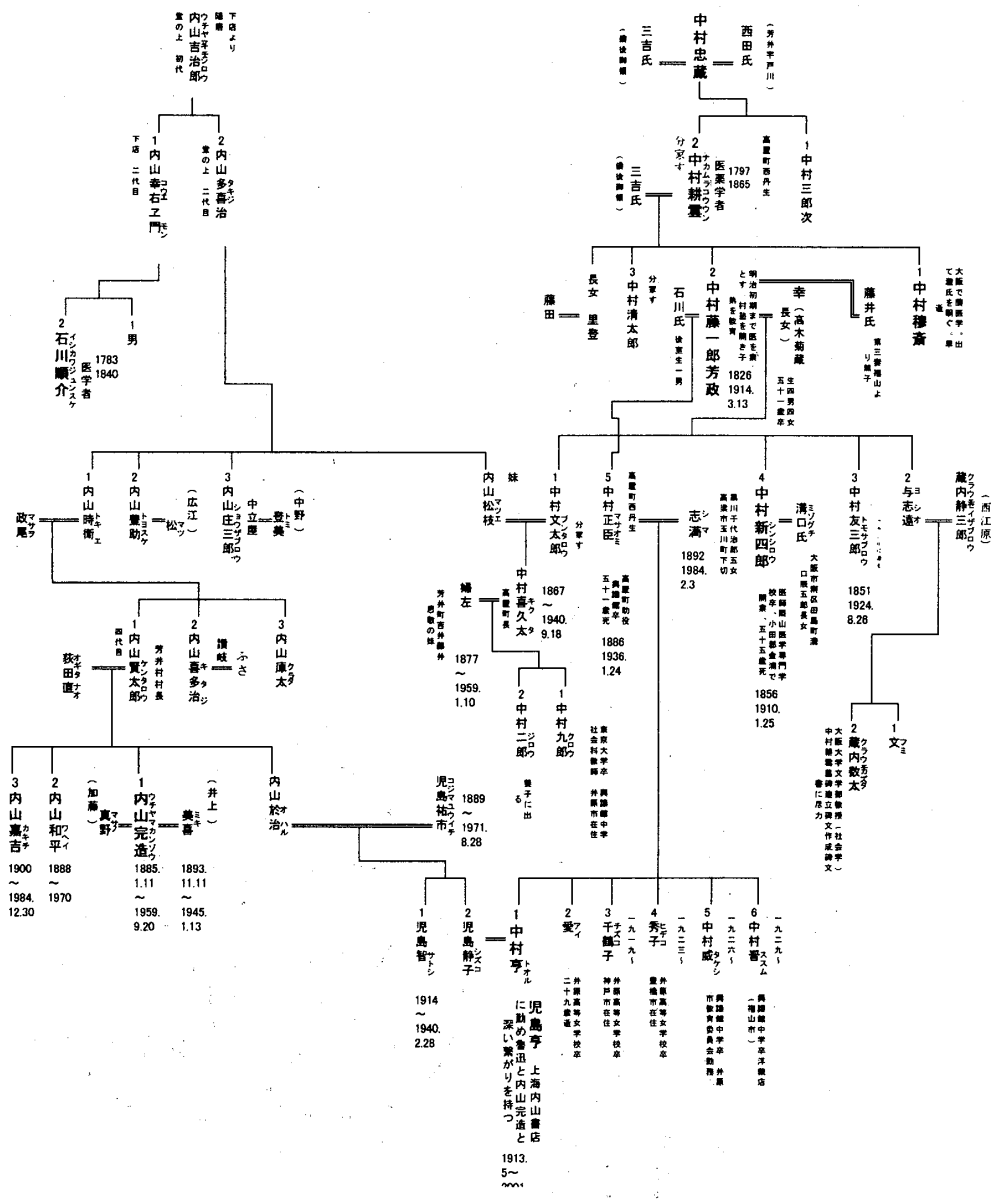
児島亨と内山完造は、それぞれの肉親である中村文太郎と内山松枝が夫婦となり、児島祐市と内山於治が夫婦となることによつてより強く結び合うのだが（系図参照）、そこには中村氏の丹生の里、内山氏の芳井の里という一つの峠を越えて隣り合う地域性がある。そしてこの地域には、かの華岡青洲の春林軒に入門して医学を修めて帰った医学者が少なくとも四人いる。後月郡梶江村の小田新作、小田敬叔、小田昌平、後月郡江原村の片山良達がそれである（『華岡青洲先生及其外科』呉秀三著「附華岡青洲先生春林軒門人録」、『医聖華岡青洲』森慶三・市原硬・竹林弘編「華岡医塾門人録」）。この青洲門下の医学者たちと両家の医学者たちとの関係の何如は今後の研究課題だが、そこには華岡青洲と魯迅という途方も無い繋がりがあるかも知れない。



中村耕雲に関する資料は、井原市文化財センター大島千鶴研究員の教示を受け、中村耕雲墓碑と中村家墓所は、中村一成氏の案内を受けた。系図の作成には、中村威氏が、碑文の翻字には中村晋氏が、飲み込みの遅い筆者に対して辛抱強く助言を与えてくれた。ここに記して感謝の意を表したい。

久保卓哉

中村家と内山家の系図



医薬学者中村耕雲の系譜—児島亨と内山完造とそして魯迅と—

The Family Tree of the Herb Doctor Nakamura
Kouun : With Reference to Kojima Touru, Uchiyama
Kanzo and Lu Xun

Takuya KUBO

In this paper I discussed on the published literature about the herb doctor Nakamura Kouun who lived in the Edo period and clarified unpublished epigraph of several medical doctor of the same family who were from Niu Takaya-village Shitsuki-county Okayama-prefecture.

Keywords: Nakamura Kouun, Medical herb, Shitsuki-gun Takaya-mura Niu, Kojima Touru, Uchiyama Kanzo,